現代米国精神分析とウィニコット

吾妻　壮
（人間科学部心理・行動科学科）

はじめに

多民族国家である米国は、他国には見られないほどの社会的および文化的多様性を誇っている。米国の精神分析もその例外ではない。今日、米国の精神分析は極めて多元的なものとなっているが、それは単に様々な学派が拮抗しつつ共存しているという意味に留まらない。そればかりでなく、学派の境界を越えて交わりが生まれ、大きな潮流の中に回収されつつある。その潮流をどう捉えるかについては様々な見解があるだろうが、その一つは、それを関係論（関係精神分析）の潮流と考えるものである。

関係論はそれまでの自我心理学一辺倒の米国精神分析界に大きな変化をもたらした。しかしそれは何の文脈もなしに突如として興ったものではない。関係論はインターパーソナル理論 interpersonal theory(注1) と英国対象関係論を土台として生まれたものであり、一つのアンブレラ（傘）理論、すなわち複数の立場を包摂するような統合的・多元的精神分析理論である。

関係論は今日、錯綜する精神分析諸理論を束ねる要の一つとなっている。本稿では、関係論と英国独立学派の理論、特にウィニコット理論との繋がりに焦点を当てて論じ、それによって現代米国精神分析の理解を深めることを目的とする。しかし、ウィニコット理論全体を俯瞰し論じることはこの小論の範囲を超える。そこで本稿では、ウィニコットを考察する手掛かりとして、ウィニコットの言葉の中でももっとも有名なものの一つである「一人の赤ん坊というものはいない」（Winnicott, 1960）という言葉を取り上げ、ウィニコットの関係論への貢献について探ることを試みる。ウィニコットによるアフォリスティックな言葉は他にも沢山あるが、この言葉は特に精神分析的含蓄に富むものであり、我々の探求の恰好の手がかりとなるだろう。

精神分析における「関係論的旋回」とその起源

本論に移る前に、米国精神分析がウィニコット理論と結びつくに至るまでの背景について述べる必要がある。米国における自我心理学批判の波が本格的に訪れたのは、1960年代から1970年代にかけてのことであった。先立って米国内には、自我心理学派の機械論的人間観に対する一種の反動としてサリヴァン Sullivan, H. S. およびトンプソン Thompson, C. らのインターパーソナル理論が生まれ、その観点を精神分析的の知見に生かすことを試みたインターパーソナル精神分析 interpersonal psychoanalysis の流れが存在していた。それはしかし自我心理学外部からの自我心理学批判であり、自我心理学派の主流派によってほとんど閑却された。

しかし1960年代以降、遂にはシェイファー Schafer, R. やギル Gill, M. M. らによって自我心理学内部からの自我心理学批判が展開されるに至り、自我心理学批判の残響は消すことのできないものになった。シェイファーは、古典的自我心理学における分析的用語の受動性の問題とエージェンシー agency 論の再検討を試みた「行為言語 action language」論（Schafer, 1976）を展開した。最初の関係論者とも言うべきミッチェル Mitchell, S. A. は、このシェイファーの論とサリヴァンのシステム論的人間観との共通項を指摘した上で（Mitchell, 1988）、それを「自我心理学の壊滅的な批判」（Mitchell, 2000）と呼んだ。そのような文脈の中で、シェイファーらの自我心理学批判は、1980年代以降の「関係論的旋回 relational turn」（Mitchell, 1998）の中で全貌を現すことになる代替的諸理論と実践的方法論の礎となっていったのである。当初自我心理学の外側からその内側へと向けられていた自我心理学への批判的視線は、自我心理学の境界を越えて内

在化されるに至ったのだった。

このように、「関係論的旋回」はその駆動源の一つを自我心理学の境界線上における葛藤に置いているが、「旋回」の源はそれだけに留まらない。そもそも米国という国そのものが保護主義と国際主義の複雑な均衡の上に成り立っているように、米国精神分析もまた、理論および実践モデルの国内における醸成と国際的潮流からの影響の均衡の上に成り立っている(注2)。そのことを論じた分析家は少なくないが、例えばギャバード Gabbard, G. O. (2000) は、精神内葛藤、妥協形成、構造モデル、防衛機制などの概念の重視によって特徴づけられる従来の米国精神分析が多様化の道を辿っていることを確認した上で、その背景にインターパーソナル精神分析の伝統に加えて英国学派の影響を見ている。

米国精神分析の主流派と英国学派との出会いのインパクトと関連して、ギャバードは英国から来訪したサザランド Sutherland, J. が重篤な患者の治療にあたって述べていたことを述懐している：

> この患者を治療するには『メラニー - 状態』の暗黒に入り込まなければなりません。
> ("You have to enter darkest 'Melanie-sia' to treat this patient.")(注3)　(Gabbard, 2000)

既に述べたような特徴を持つ米国の伝統的精神分析にそれまで慣れ親しんでいたギャバードはサザランドの示唆に驚きを禁じ得なかったという。

米国精神分析への影響という点についてギャバードは、英国学派の中でも特に独立学派に対して大きなクレジットを与えている。ギャバードは、米国精神分析における二者心理学的方向性は、米国のインターパーソナル学派の貢献のみならず独立学派の貢献によるものが大きいと述べている。ギャバードは独立学派の分析家の仕事がインターパーソナル学派のサリヴァンやトンプソンの仕事と同様の方向性を米国精神分析に示し、それが後に二者心理学的方向性の学派的結実である関係学派の出現へとつながっていったことを論じている。

このように独立学派を関係論の主たる源流の一つとみなす考え方は、関係学派内部で広く共有されている。そして独立学派の中でも、特にウィニコット Winnicott, D. W. の仕事が参照されることが多い。その理由は様々であるが、その一つは、ウィニコットが精神分析における外的対象の問題について、そして内的世界と外的世界の交わるところについて深く考察しているためであろう。

それではウィニコットは、内的世界と外的世界の交わりをどのように見ていたのだろうか。「遊ぶことと現実」(Winnicott, 1971) の中でウィニコットは、外的現実と別個の内的現実の存在について触れた後で、「しかし、それで十分なのか」と問い、次のように続けている：

> 人間の生活の第三の部分、私たちが無視することのできない部分は、**経験すること** *experiencing* の中間領域であり、内的現実と外的生活の双方がそれに寄与している。
> (Winnicott, 1971, p. 2) (強調原著者)

ウィニコットによる「経験すること」の領域への着目は、インターパーソナル学派の伝統を知る者には違和感なく受け入れられるものである。なぜならば、ウィニコットと同じく、しかし異なる理論的背景から内的世界と外的世界という区別を越えて「経験すること」の重要性について論じたのは、インターパーソナル学派の分析家達だったからである。例えばその先駆者の一人であるサリヴァンは、「情報とは、我々の経験のうち、我々が気付いている、あるいは容易に気付くことのできるもののことである」(Sullivan, 1938) と述べることで「情報」と「経験」を峻別したが、それはすなわち、我々の経験的生活とは意識的知覚に基づく情報という狭い概念によって還元的に理解できるものではないことを論じたものである。このサリヴァンの論が、内的現実と外的生活の中間領域として経験を捉えたウィニコットの理解と少なからず重なっていることは明らかであろう。さらに、サリヴァンの流れを汲むインターパーソナル学派のレヴェンソン Levenson, E. A. は、インターパーソナルという言葉は、場としての精神内界に対するインターパーソナルという二項対立として理解されるべきではなく、「私が想像と経験と呼ぶところの間の、あるいはより正確には、ポエティクスとプラグマティクスの間の二分法」

(Levenson, 1988) として理解されるべきであると論じている。すなわちレヴェンソンは、心がどのような想像を持つに至るのかということに関する心の機能に加え、インターパーソナルに実際に起こっていることがどのような経験として心の中に届きどのような変遷を遂げるのかということに関するもう一つの心の機能があると論じたのである。インターパーソナル理論とウィニコットの理論が関係論の源流となったのは、理論構築の様々な位相における違いがあるとしても、内的世界のみならず外的現実をも重視する傾向を両者が共有していたという事情を背景にしている。

「一人の赤ん坊というものはいない」

関係学派が独立学派に影響を強く受けていること、その中でもウィニコットの影響が大きいことを論じた。その上で次に考察するべきは、関係論が一体**どのように**ウィニコットから影響を受けているのか、ということである。そのことについて考察するために、次にウィニコットの「一人の赤ん坊というものはいない」という言葉を取り上げ、検討する。

この言葉はウィニコットが1940年に英国精神分析協会のディスカッションの場で表したものであり、その全体は次のようなものである：

> 一人の赤ん坊というものはいない。その意味はもちろん、赤ん坊がいればそこには必ず母親のケアがあるのであって、母親のケアがなければ赤ん坊というものはいない、ということである。 (Winnicott, 1960)

一般に物事を図式化することは我々の理解を助けるが、一方その深みを打ち消してしまう危険性を持つ。ウィニコットのしばしば茫洋とした印象を与える書き方を前に、我々はそれを既知の枠に嵌め込みたい欲求を感じるかもしれない。しかしオグデン Ogden, T.H. (2001) が述べているように、ウィニコットは意味が読者によって創造され発見されるような書き方をしているのであって、そのような欲求はウィニコット理解の妨げになるに過ぎない。「一人の赤ん坊というものはいない」というウィニコットの言葉についても同じことが言えるのだが、安易な単純化に堕してしまう危険性を重々承知の上で、本稿ではこの言葉の意味を二つの側面から取り上げる。その二つをそれぞれ**認識論的意味**と**存在論的意味**と呼ぶことにする。

認識論的意味

「一人の赤ん坊というものはいない」という言葉の**認識論的意味**とは、母親の主観性と赤ん坊の主観性が母子ユニットについての一つの真実を共構築するということを指している。何人かの分析家がこの認識論的意味に注目し、それを自らの思考と融合させて論じている。例えば、自己心理学派のバコール Bacal, H.A. は、コフートの至適なフラストレーションを批判的に拡張した至適な応答性の概念を論じた論文の中で、「一人の患者というものはない、分析的カップルがあるだけだ」(Bacal, 1985) と表現している。バコールによれば、分析プロセスは一人の患者と一人の分析家が共同で織りなすものである。各々の性格と理解のあり方が固有のカップルを産み出し、その結果至適な治療的経験の性質が決定されるのである。またレヴェンソンは、「脳は個別のものだが、心は場の現象であり、ネットワークであり、波である」と論じた上で、「一つの心というものはない」(Levenson, 2001) と述べている。さらにレヴェンソンは、「そのネットワークの拡張のためには他者が必要であって、その拡張が、**それ自体**、回復をもたらし得るのかもしれない」(強調引用者) と続け、心の「ネットワーク」によって伝達される情報の中身のみならず、ネットワークの拡張そのものが治療的であることを論じている(注4)。

真実というものが主体と他者の両者によって共構築されていくという考え方は、関係性理論に基づく理論および臨床の大きな特徴であり、臨床場面での認識およびそれに基づく解釈の持つ意味を大きく変更する。従来、分析家の仕事は心の中の真実を適切に認識し、それを解釈として患者に伝えるものとされてきた。既に患者の心の中に存在している真実を見つけ出して解釈するというこの分析作業形態は実証主義的アプローチとされ、構築主義的アプローチと対照的である。構築主義的アプローチにおいては、真実は患者と分析家の二者によって共同で構築される。解釈は、未だ構築されていないもの、言語

化されていないものを言葉にしていく作業である。既にそこにある真実を告げる作業ではない。

コフート Kohut, H. の自己心理学の流れを汲むストロロウ Stolorow, R. D. らの間主観的学派もまた、共構築的な考え方を支持している（Stolorow et al, 1987）。ストロロウらは、意味が生成されるのは精神内界においてではなく間主観的フィールドにおいてであると考えた。ストロロウらは「隔離されたマインド」を「神話」に過ぎないと看破するが、同様の「神話」は、「一人の赤ん坊というものはいない」としたウィニコットがいわば「隔離された赤ん坊神話」として既に表現していたと考えても良いのかもしれない。さらに同様の視点は、ミッチェル Mitchell, S. A. の「関係基盤」の概念、ホフマン Hoffman, I. Z. の社会構築主義論などにも見ることができる。このように、「一人の赤ん坊というものはいない」という言葉は現代精神分析が共有する認識論的な問題意識の先駆となっている。

存在論的意味

「一人の赤ん坊というものはいない」という言葉には、認識論的意味のみならず**存在論的意味**も含まれている。ウィニコットは、赤ん坊がいれば必ず母親のケアがあると述べているが、それでは母親のケアとは一体何であろうか。一つの考え方は、オグデン Odgen, T. H. の言葉を借りるならば、その存在論的意味について考察することである。ウィニコットの「抱えること holding」概念についてオグデン（2004）が論じていることは、この母親のケアについての理解を提示している：

> ウィニコットにとって、抱えることとは一つの**存在論的な概念**である。ウィニコットはそれを、様々な発達段階における生き生きとするということの経験の特有の質感を探究するために、そして存在の連続性の感覚が時を超えて保たれていくことを可能にするような変わりゆくイントラサイキック intrapsychic(注5) - インターパーソナル interpersonal な方法を探究するために用いているのである。
>
> （Ogden, 2004）（強調引用者）

抱えることとは、オグデンによれば、第一に赤ん坊が存在し続けること going on being を可能にするものとして始まる。その際の母親の情緒状態が、「原初の母性的没頭 primary maternal preoccupation」（Winnicott, 1965）である。オグデンは、これら二つの用語には主語がないことに注目し、それは、母親の主体性が顕わになることは赤ん坊が存在し続けることにとって必要な繊細さを壊してしまうからだと論じる。人生最早期において母親が提供する抱えることにおいては、赤ん坊と母親は一つのユニットとしてのみ存在しており、赤ん坊は自ずと主体性を欠いた状態であって、母親はいわば二次的に主体性を失った状態にある。

この状態の特有の機能とは何だろうか。オグデンはそこに時間性の問題を引き込む。彼は次のように述べている：

> 母親が発達早期において心理学的および身体的に抱えることの主要な機能には、過酷で変えることのできない**時間の他者性**から乳児を守り、存在し続けるという状態を保つことが含まれる。　（Ogden, 2004）（強調引用者）

さらにオグデンは、「『私でないもの not-me』への気づきが耐え難く、そして乳児の存在の連続性にとって破壊的である段階においては、時間は乳児にとって他者である」と続けて論じている。すなわち、抱えることは「時間の他者性」から赤ん坊を守ることで赤ん坊の自己の連続性の感覚を支える。抱えることなしでは存在の根底そのものが危殆に瀕する。その意味で、抱えることの概念は赤ん坊にとっての存在論的要件を示している。

このような理論的理解は臨床的にはどのような影響を我々に与えるのだろうか。オグデンの理解を経由すれば、ウィニコットが示しているのは、分析家の根源的な役割が患者の存在論的基盤を抱えることにあるということだ。このことは、分析家の機能が認知的理解や思考、解釈に限定されるものではないという考え方に影響を与えている。また、ウィニコットに強い影響を受けている関係学派のスロッチャワー Slochower, J. A. は、次のような重要な指摘を行っている：

抱えている瞬間々々においては、分析家は自分の個別の主観性を明示的あるいは暗示的に含むような解釈あるいはそれ以外の介入によって自分自身を用いる可能性を持たない状態に置かれる。 (Slochower, 1996, p. 6)

このような分析家の状態は、ビオンの言う「連結 linking」(Bion, 1959) を行い、解釈を中心に分析作業を進めている時の分析家の自分自身の用い方とは異なるものであるとスロッチャワーは論じている。抱えている間、分析家は自分の主観性を一時的に棚上げにしなければならない。このことをスロッチャワーは、「分析家は自分の経験を**括弧に入れる** *bracket* 必要がある」(Slochower, 1996, p. 26) (強調原著者) と表現している。さもなくば、赤ん坊＝患者は「時間の他者性」(時間性と我々の存在の根源的繋がりを思い起こすならば「存在の他者性」と言い換えても良いだろう) によって存在の基盤を失いかねない(注6)。

存在論的意味—他者の存在の認識—

以上のように、ウィニコットの存在論的視線は第一に赤ん坊自身の存在論的要件に注がれている。しかしそれにとどまらず、ウィニコットの存在論的視線は他者の存在の認識へとさらに広がっていく。

スロッチャワーの論じる分析家の主観性の「括弧入れ」が必要になる瞬間について、臨床場面を思い描くことは難しくはない。しかし、ここに考えなければならない問題が残る。我々は「括弧に入れること」を延々と続けることができるのだろうか。分析家の他者性と母親の他者を患者＝赤ん坊は受け入れていく必要があるのではないか。

ウィニコットは、赤ん坊の存在の要件のみならず、赤ん坊が存在しつつかつ母親という他者と共にあるということの問題についても論じた。この問題は、主観性の中の対象が客観性を持った別個の主体へと変容していく過程と関係している。ウィニコットは、「対象の使用と同一化を通して関係すること」(Winnicott, 1969) の中で、「対象に関わることとは、孤立したものとしての主体という観点から描くことのできるような、主体の経験である」と述べた上で、そしてこの「対象に関わること」の段階から一段進んだ情緒発達の段階としての「対象の使用」の段階を論じている。「対象の使用」の段階に至るには、主体が対象を破壊し、しかし主体による破壊から対象が生き残る必要がある。そのことによって対象は、単に主体による投影によって作られたものではなくなり、万能的コントロールの領域外に置かれることになる。このいわば第二の存在論的位相についての問題意識が、現代の関係論がウィニコットから受け継いでいるもう一つの点である。ウィニコットから問題意識を受け継ぎつつ、関係論的思考は他者の主観性という観点からウィニコットのアイデアをさらに拡張しようとしている。

間主観性の問題と関係論

ウィニコットが「対象の使用」概念で触れた問題は、より現代的な言葉で言えば間主観性 intersubjectivity の問題である。すなわち他者を自分とは別個の中心を持つ他者として認識する能力としての間主観性である(注7)。

ウィニコットによる他者性を巡る議論に注目している分析家は少なくないが、ここではその中でも三人の関係学派の分析家 (スロッチャワー、ベンジャミン Benjamin, J.、そしてブロンバーグ Bromberg, P. M.) の議論を取り上げる。

スロッチャワーは、分析家の役割には本質的に二つの異なる次元があると論じる。そしてこれらの次元は、対象の使用の段階の前と後の区別に対応しているという。一つ目の次元は、分析家の主観性、分析家の外在性 externality を導入することなく「括弧に入れ」、患者の情動的成長を促すようなあり方である。もう一つの次元は、患者とは別個の主体であることを導入し、分析家の「分離した主観性 dysjunctive subjectivity」(Slochower, 1996, p. 25) を積極的に提示するようなあり方である。前者と後者は、ウィニコットが「あること being」と「すること doing」と区別したものとも対応しているとスロッチャワーは論じている。なお、ウィニコットはこれら二つの次元は女性的要素と男性的要素として理解できるとも論じているが、スロッチャワーはそのような性差による区別に関しては論駁している。

これらの二つの次元は両立し得るのだろうか。関係学派の分析家は、分析状況における分析家の特権

性について否定的である。すると、次のような疑問が生じる：抱えるという意図を分析家が持つに至るというプロセス自体が分析されなければならないものなのではないか、抱えるということは分析家の側の問題に起因するエナクトメントなのではないか、分析家が自分の主観性を抑えて抱えるということは究極的には不可能なのではないか。

スロッチャワーは、これらの疑問に対する説得力のある答えを展開している。スロッチャワーにとって、臨床の現場において、抱えることと間主観性の達成は両立し得ないものではない。抱えることは分析家の内部における内的格闘を要請するものであるが、分析家のそのような内的格闘によってこそ、分析状況が単なる非生産的なエナクトメントと化してしまう危険性を乗り越えて抱えることと間主観性を共に達成することができる。抱えることと間主観的関わり合いの二つの次元を区別し、かつその両立を目指すというスロッチャワーの臨床姿勢は臨床的示唆に大変富む。

ベンジャミン（1990）は、我々の理論と実践の向かう目標に関して「対象のあった所に、主体をあらしめよ」と述べている。ベンジャミンによれば、精神生活には精神内界と間主観性という二つの次元があり、それらは相補的な形で存在している。そしてこれら二つの次元は絶えず緊張感をはらんで存在していなければならないのであって、「問題なのは、精神内界と間主観性の間の、ファンタジーと現実の間のバランスが損なわれることである」と続ける。

ベンジャミンの議論はヘーゲルの哲学を引用する複雑なものだが、以下のように簡潔に理解することができるだろう。すなわち今、心を考えるに当たって、領域として心を考えることを一時棚上げにする。インターパーソナルという言葉は、精神内界の場に対するものとしてのインターパーソナルな場を指す言葉として理解されるべきではなく、機能的に関する言葉として理解されるべきであると論じたレヴェンソンの考え方をここで思い出したい。その上でさらに、心の機能として、精神内界に関するものではなく、外部の他者の認識に関するものを考える。これが間主観性に関わる心の機能である。ベンジャミンによれば、この間主観性に関わる心の機能が損なわれると、精神内界に関する機能が代償的に肥大し、内在化によって精神内構造を作りだす動きが強化される。内在化のメカニズムとは、主体による対象の破壊が対象によって生き延びられないとき、間主観性の能力が妨げられ、その結果防衛的プロセスとして動員されるものである。ウィニコットのいう「対象に関わること」の段階は、精神内界的に対象を扱うモードがこのようにして肥大している状態のことである。ベンジャミンは、分析がなされるべき領域として間主観性の領域を導入している。ベンジャミンは、ウィニコットの考えを、時間の経過とともに移行していく二つの発達段階と考える代わりに、他者の否定と肯定の間の基本的な緊張であると考える。ベンジャミンの理論は非常に大きな分析的領野を我々に示している。精神内界の領域あるいは機能についての我々の探索はかなりの程度まで進んできたが、間主観性の領域あるいは機能についての我々の分析的理解はまだまだ限られているからである。

最後に、ブロンバーグの仕事に触れたい。ブロンバーグは、ベンジャミンが論じている認識の問題への臨床的なアプローチを詳述している。ベンジャミンの論じる間主観的な関わり合いとは、臨床的にはどのようにして扱うことができるのだろうか。ブロンバーグは、間主観性の領域における分析の作業を、サリヴァンに辿ることのできる心の多重性の理論を用いて理解しようとしている。ブロンバーグは、次のように述べている：

> 私は、「対象」とは、変わることのない構造ではなく、ダイナミックな構造の一構成要素であると考える。このパースペクティヴからすると、患者は、対象があたかも自分の望むある固有の質を持っているかのように、ある特定の「類の」対象に愛着を示すようになるのではない。対象が実際に創り出されるプロセスは、インターパーソナルな関わり合いのプロセスである。　(Bromberg, 1995)

ブロンバーグにとって、「対象が実際に創り出されるプロセス」、あるいは対象の使用への移行は、患者および分析家の解離的構造が壊れ、しかしそれに双方が耐えられること、すなわち自分が既に持っ

ている相手についてのイメージおよび自分が既に持っている自分についてのイメージが実は解離的構造の一部であったという事実を双方が耐え忍ぶことができる際に初めて達成され得る。そして、患者による破壊を分析家が生き延びることとは、このように解離的構造の崩壊を耐え忍ぶことであるとブロンバーグは論じる。ブロンバーグの治療の焦点は、解離的構造の生じる**プロセス**にある。それは、精神内界的な機能の理解、精神内容の理解と対比されるものである。ベンジャミンが精神内界の領域と相補的であるといった間主観性の領域における作業の実際をブロンバーグは示している。

おわりに

2008年のアメリカ心理学会第39部会は「知っていること、知らないこと、何となく知っていること：精神分析と不確実性の経験 Knowing, Not Knowing, and Sort-of-Knowing: Psychoanalysis and the Uncertainty of Experience」という極めて魅力的なタイトルを掲げてニューヨークで開催された。私はタイトルを読んだだけで既に半分満たされたような気持ちになっていたが、会合に実際に参加することで、私の充足感は十二分なものとなった。ウィニコットを読む経験は、このタイトルに込められているものとどこかで重なるように思う。ウィニコットは、分かるようで分からず、分からないようで分かる世界を巧みに描いた。ウィニコットが現代の関係学派の分析家達を魅了し続けているのは、内的世界と外的世界の交わるところに生ずるパラドクスへの彼らの視線が、ウィニコットの視線と交差するからであろう。本稿ではウィニコットの「一人の赤ん坊というものはいない」という言葉を手がかりに、ウィニコットと現代の関係学派の関わりについて概観した。本稿が現代精神分析の理解の何らかの助けになれば幸甚である。

（注１）interpersonal という言葉は、通常「対人的」あるいは「対人関係的」と訳出される。しかし私は、この訳にはやや違和感を覚えている。「対人」という言葉は、ある特定の主体が中心にあって、その上でその主体が他の主体に対峙する、というニュアンスを持っているが、interpersonal という言葉には本来そこまでの意味はない。それは単に、「人のあいだ」という意味に過ぎない。intersubjective という言葉は、同じ様に訳出するならば、対主観的ということになってしまうが、もちろんそうは訳出されず、通常「間主観的」と訳され、こちらは自然な響きを持っている。それでは、「間人間的」、という言葉という訳も考えられることになるが、それは日本語として不自然である。そこで本稿では、試みとして、interpersonal を単に「インターパーソナル」とカタカナ表記にしてみた。その方が原語のニュアンスが保たれると私は考える。

（注２）もちろん米国精神分析に分析的保護主義傾性が全くないわけではない。精神分析理論の大半を輸入に頼る日本の精神分析状況とは事情を異にする。しかし、多民族国家であることもあって元々自由闊達な議論を好む風土の米国において、一学派のヘゲモニーが長く続かなかったことはある意味当然であろう。

（注３）「メラニー - 状態 Melanie-sia」とは、Gabbard の造語であるが、痛覚脱失 analgesia あるいは麻酔 anesthesia などとかけて、何かを失う形で別種の状態に入るという意味を持たせてある。メラニー・クラインの描く光も届かぬ精神世界の最奥部に、通常の理念的世界を捨てて入り込むという意味であろう。

（注４）このレヴェンソンの論は、治療作用が認識論的領野に留まらず、存在論的領野にも深く及んでいることを示唆している。

（注５）intrapsychic の訳。通常「精神内界」と訳出されるが、interpersonal をインターパーソナルと訳出したのに対応させて、イントラサイキックとし、英語を併記した。この方が、intra（内部）- psychic（精神）という構造が分かりやすいだろう。

（注６）時間性の議論といえば当然哲学者ハイデガーの時間論が頭に浮かぶ。厳密な議論はもちろん私の力の到底及ばないところではあるが、参考までに少しだけ触れておく。ハイデガーは、時間性とは我々の存在のあり方の本質であると論じている（Heidegger, 1927）。ハイデガーは、我々は時間軸に沿ったある種の運動性、すなわち現在から過去や未来へと出でようとする運動性を予め備えていると考え、それを現存在の「脱自性」と呼んだ。ハイデガーは脱自性が人間に所与のものであるように論じたが、ストロロウは、臨床精神分析家としてハイデガーの論を考察した上で、時間の脱自性は他者と相互に情緒的交流が可能な場所の存在（他者との間主観的コンテクスト）がなければ成り立たないと論じている（Stolorow, 2007）。オグデンのウィニコット理解は、ストロロウ

によるハイデガー時間論への精神分析的補足としても捉えることができることを指摘しておきたい。時間性と我々の存在とは本質的につながっているのだが、その繋がりの前提として、母親＝分析家のケアによって安全性が確保されている必要がある。

（注７）ここで少し注意をしなければならないのは、ストロロウらの言うところの間主観性は二者が織り成すフィールド全体すなわち相互作用全体を指す言葉であるが、ここでいう間主観性の能力とは、他者の認識のあり方についての特定の能力のことである。ストロロウとは異なり、スロッチャワー、ベンジャミン、ブロンバーグはこのような意味で間主観性という言葉を用いている。乳児研究で有名なスターン Stern, D. N. の使用法もまたこのような意味においてである。

文献

Bacal, H. A. (1985). 16 Optimal responsiveness and the therapeutic process. *Progress in Self Psychology, 1,* 202-227.

Benajmin, J. (1990). An outline of intersubjectivity: The development of recognition. *Psychoanalytic Psychology, 7S (Supplement),* 33-46.

Bion, W. R. (1959). Attacks on linking. *International Journal of Psychoanalysis, 40,* 308-315.

Bromberg, P. M. (1995). Resistance, object-usage, and human relatedness. *Contemporary Psychoanalysis, 31,* 173-191.

Gabbard, G. O. (2000). American psychoanalysis in the new millennium. *Journal of the American Psychoanalytic Association,* 48, 293-295.

Heidegger, M. (1927). *Sein und Zeit.* Tübingen: Max Niemeyer. 原佑・渡辺二郎（訳）(1980). 存在と時間. 中央公論新社、東京.

Levenson, E. A. (1988). Real frogs in imaginary gardens: Facts and fantasies in psychoanalysis. *Psychoanalytic Inquiry, 8,* 552-567.

Levenson, E. A. (2001). Freud's dilemma: On writing Greek and thinking Jewish. *Contemporary Psychoanalysis, 37,* 375-390.

Mitchell, S. A. (1988). The intrapsychic and the interpersonal: Different theories, different domains, or historical artifacts? *Psychoanalytic Inquiry, 8,* 472-496.

Mitchell, S. A. (1998). Attachment theory and the psychoanalytic tradition: reflections on human relationality. *British Journal of Psychotherapy, 15,* 177-193.

Mitchell, S. A. (2000). *Relationality: From Attachment to Intersubjectivity.* Hillsdale, New Jersey: The Analytic Press.

Ogden, T. H. (2001). Reading Winnicott. *Psychoanalytic Quarterly, 70,* 299-323.

Ogden, T. H. (2004). On holding and containing, being and dreaming. *International Journal of Psychoanalysis, 85,* 1349-1364.

Schafer, R. (1976). *A New Language for Psychoanalysis.* New Haven, Connecticut: Yale University Press.

Slochower, J. A. (1996). *Holding and Psychoanalysis: A Relational Perspective.* Hillsdale, New Jersey: The Analytic Press.

Stolorow, R. D., Brandchaft, B. & Atwood, G. E. (1987). *Psychoanalytic Treatment: An Intersubjective approach.* Hillsdale, New Jersey: The Analytic Press. 丸田俊彦（訳）(1996). 間主観的アプローチ―コフートの自己心理学を超えて. 岩崎学術出版社、東京.

Stolorow, R. D. (2007). Trauma and Human Existence: Autobiographical, Psychoanalytic, and Philosophical Reflections. London, Routledge.

Sullivan, H. S. (1938). The Data of Psychiatry. In: Stern, D. B., Mann, C. H., & Kantor, S. Schleshinger, G. (Eds.) (1995). *Pioneers of Interpersonal Psychoanalysis.* Hillsdale, New Jersey: The Analytic Press.

Winnicott, D. W. (1960). The theory of the parent-infant relationship. *International Journal of Psychoanalysis, 41,* 585-595.

Winnicott, D. W. (1965). *The Maturational Processes and the Facilitating Environment: Studies in the Theory of Emotional Development.* International Psycho-Analytical Library, 64: 1-276. London: The Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis.

Winnicott, D. W. (1969). The use of an object and relating through identifications. In: Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality.* London: Tavistock. 橋本雅雄（訳）(1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社、東京.

Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality.* London: Tavistock. 橋本雅雄（訳）(1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社、東京.